

イエスと共なる旅路を行く私たち ～冒険の旅

磯 晴 久

奨励者紹介〔いそ・はるひさ〕

日本聖公会大阪教区主教
学校法人桃山学院学院長
キリスト教学校教育同盟理事

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

(ヨハネによる福音書 3章16—21節)

私は日本聖公会大阪教区の主教、桃山学院学院長の磯晴久です。今日は同志社大学今出川水曜チャペル・アワーにお招きいただき、神さまと皆様に感謝いたします。

今日はアドベント礼拝ということですが、この期節を日本語で皆様は何と呼んでおられるでしょうか。「待降節」でしょうか。私の所属しています聖公会では、この期節を「降臨節」と呼んでいます。クリスマス前の約1カ月の期間を指して使います。イエスの誕生を待ち望む、そして再びイエスの来られる時、再臨の時を待ち望む大切な期間です。「待ち望む」というテーマからしますと、「待降節」の方がいいかなと思うことがあります。

最初に、自己紹介ではないのですが、少し聖公会の宣伝をさせてください。聖公会は「聖書と伝統と理性」を大切にしています。そして聖公会が、特に大事にしていることがあります。それは、「ヴィア・メディア」ということです。

ヴィアは道、メディアは真ん中という意味ですので、直訳すると「中道」となります。以前、他のプロテスタントの先生方から、「聖公会は中道ですね。なんだかカトリックかプロテスタントか、どっちつかずで、中途半端な感じがしますね」と言われて、返す言葉がなかったのですが、本来の意味はそうではありません。

ヴィア・メディアは、「私たちは真理を求め続ける旅人だ」ということを意味しています。もっと平たく言いますと、イエスと一緒に、イエスとお話ししながら、真理を求めて、旅を続ける旅人であるということを大切にしたいと願っている教派が聖公会です。この「旅人」だということが、後で今日の主題「イエスと共なる旅路を行く私たち～冒険の旅」とつながっていきます。

アドベントの意味するもの

このアドベントという言葉ですが、英語の advent という単語の読みを、そのまま日本語でも使っています。皆様もこのチャペル・アワーで聞かれたことがおありかと思いますが、元々はラテン語のアドベントゥス (adventus) からきた言葉です。ad (～に向かって)、venire (来る) という意味です。やって来ること、到来の意味を表わす言葉です。もう一つアドベントと同じ語源をもつ単語があります。アドベンチャー (adventure) です。冒険、胸が躍るような体験のことです。今から起ころうとする事柄を意味するわけです。

アドベントはイエスがこの世に向かってやってきたこと、神の子が地上に、暗闇に光をもたらすために、私たちのところにやってきたこと、それは前途多難な社会、状況に向かっていく冒険、アドベンチャーと言ってもよいかもしれません。単に静かに待っていればよいということではなくて、受身的ではなくて、私たちもこの世の間に気づいた時に、イエスと共に闇に光をもたらすために、冒険の旅に出る、そのようなことをアドベントという言葉は、内に秘めているのだと思います。

恐れず旅に出る

クリスマスには、「メリー・クリスマス。クリスマスおめでとうございます」と言います。明日は桃山学院大学のクリスマス礼拝があります。これから関係大学、諸施設で毎週クリスマス礼拝が続きます。そのたびに「クリスマスおめでとうございます」を言いますので、本番の24、25日になると、いささか疲れてきて、あんまり言いたくないなんてことに毎年なります。なぜ、クリスマスに「おめでとう」と言うのでしょうか。それはご存知のように、イエス・キリストのお誕生をお祝いするからです。イエス・キリストは、神さまからの私たちへのプレゼントです。どういうプレゼントかという、その生涯をとおして、私たちに「愛されていることと愛すること」の大切さを教えるためのものでした。先ほど読んでくださった聖書ヨハネによる福音書3章16節「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」。「愛する」ことを伝えるために、イエスは来られたわけです。

さて、皆様は映画をご覧になることはありますか。私は若い頃映画鑑賞が趣味でしたが、最近あまり観ていないなあと、少し寂しい思いがしています。

私が大好きな映画に「男はつらいよ—寅次郎ハイビスカスの花」があります。渥美清主演、フーテンの寅さんシリーズ第25作です。寅さんのもとに、懐かしい、そして何となく心惹かれ合うリリー（浅丘ルリ子）から手紙が舞い込みます。沖縄で仕事中に吐血して倒れ、入院中だと言うのです。そして手紙に「寅さんに一目逢いたい」とありました。寅さんは彼女の願いを叶えたいと思うのですが、この作品での寅さんは飛行機が大嫌い、大の苦手という設定で、船では行けないのかなどなど、大騒動になります。しかし妹夫婦に飛行機代を工面してもらい、みんなに励まされ、客室乗務員に支えられながら、ほうほうの体で飛行機に乗り、那覇空港へ到着します。ふらふら、よれよれになりながら、沖縄にたどり着きます。そして、リリーが入院する病院へ行き、そこで感激の再会をします。「リリー!」「寅さん」。寅さんの献身的な介護もあって、リリーは回復していきます（そこから先、興味ある方はDVDでご覧ください）。

実は二人が感激の再会をする時、テレビ放映ではカットされてしまうシーンがあります。その場面が私は

大好きなのです。劇場版では、病院の付属の保育園（礼拝堂？）が映し出され、賛美歌を歌う子どもたちのかわいい歌声が聞こえてくるのです。「主われを愛す 主はつよければ われよわくとも おそれはあらじ」

山田洋次監督の意図は分かりませんが、リリーを想う気持ちが、飛行機が大の苦手だった寅さんから恐れ的心を乗り越えさせ、そしてそこに癒しの出来事が起こることを、山田監督は描いたのではと私は感じました。愛するとは何か、愛するとはどういうことかがとてもうまく描かれていると感心する場面なのです。愛は冒険なのです。愛は恐れを乗り越えさせるのだ、それが愛なのだと、山田監督は描きたかったのではと、私は勝手に考えています。闇、孤独の中にいたリリーさんに愛の光が届いた。私は、映画を見ながら、ヨハネの手紙の一節、「愛には恐れがない」（ヨハネの手紙一4章18節）を思い出しました。愛は恐れを乗り越えさせる力があるのです。

毎年クリスマスに、イエスは「愛するとはどういうことか」を伝えるために、私たちのところにやってこられます。そして、私たちへの愛を伝えるために、死の恐れを乗り越えて十字架の道を進み行かれるのです。

暗闇に光を

最初に申しました「ヴィア・メディア」を思い出してください。

ヴィア・メディアは、「私たちは真理を求め続ける旅人だ」ということを意味していること、イエスと共にイエスとお話ししながら、真理を求めて旅を続ける旅人であるということを大切にしたいと願っている教派が聖公会だと申しました。

ですから、アドベント（到来、冒険）ということに結び付けて言いますと、神はイエスを世に送り出されて、闇に愛の光を届けようとされた。そしてクリスマスに私たちは、寅さんのように、恐れを乗り越えて、私たち自身がイエスと共に、闇に光を届けるために冒険の旅に出るように促されているのです。

先日、私は日本の聖公会と韓国の聖公会の会議があって、釜山に行きました。そこで1日フィールドワークがあって、釜山から2時間半ほど車で行ったハプチョン（陝川）という町に行きました。ハプチョン原爆被害者福祉会館を訪問し、在韓被爆者と在韓被爆者を支援する人たちと交流するためでした。広島と長崎に投下された2発の原爆で、およそ7万人の朝鮮・韓国の方が被爆し、4万人が亡くなりました。広島にはこのハプチョン出身の方が多くおられたのです。無理やり連れて来られた方、貧しさのゆえに日本に行かざるを得なかった方々です。ハプチョンは豊かな穀倉地帯だったのですが、日本の支配の下、土地が収奪され、作物も綿花に特化させられて、他の作物を作ることが許されなかったために、貧困に苦しむことになりました。広島には軍需工場がたくさんあったのでハプチョン出身の人々は広島に連れて来られたり、住まざるを得なくなり、そこで被爆し、戦後故郷に戻って来られたわけです。当初日本の被爆者支援は、日本に住んでいることが条件だったため、在韓被爆者は見捨てられた人々になってしまいました。その後の在韓被爆者や2世の方々の命がけの闘いと、いろいろな人々の働きかけと支援活動によって、1990年、韓日政府が重い腰をあげ、やっと在韓原爆被害者支援の福祉事業が始まりました。暗闇の中に光が射し始めました。1996年に福祉会館が開館。現在97名が入居され、平均年齢は82歳です。治療やリハビリが行われ、老人ホームの役割も果たしています。趣味・健康教室などが行われています。園庭には亡くなった方の慰霊碑もあります。

しかし、まだ被害者の全貌は分かっていません。一人ひとりに支援が届いているかというところではあり

ません。日本人被爆者の調査は、死亡者は何十何人まで分かっているのに、朝鮮・韓国の人数はおおよそなんです。社会の片隅で苦しんでいる人々がまだいます。被爆2・3世の問題もあります。病気や体調不良で苦しんでいる人がいますが、公の支援はない状態です（日本でも被爆2・3世問題は取り上げられていません）。

在韓被爆者に光を届けることを、日本聖公会の課題にしないといけないという思いをもって帰ってきました。毎年広島と長崎では原爆記念平和礼拝が行われ、逝去された方々、後遺症に苦しむ方々を憶えて核兵器の廃絶を願って祈りと学びの時をもち、平和行進が行われています。被爆された方々の中に韓半島・朝鮮半島の方々や米軍捕虜がいたことは憶えられていますが、在韓被爆者のことをどれほど身近に感じていたかという、心もとない気がします。

この世界、いたるところに暗闇が存在しています。教会はもちろん、キリスト教主義の学校の、そこで学ぶ者の使命として、この世界の暗闇に光をもたらすことがあるのではないのでしょうか。

先日『チャペル・アワー奨励集』を送っていただきました。越川先生がAIのことを取り上げて、実は「人間とは何者か」が問われていると語っておられました。そしてAIにはなくて、人間に残されている大切なものに、「憐れみの心」「深い共感の心」があるのではないか。それを磨いていく必要を語っておられました。深いこの世界の暗闇への共感、そこに光を運ぶ働きです。

クリスマス、そしてアドベントは、神はイエスを世に送り出されて、闇に愛の光を届けようとされたことを憶えると共に、私たちは、イエスと共に恐れを乗り越えて、私たち自身が闇に光を届ける冒険の旅に出るように、招かれている期節ではないのでしょうか。

2018年12月5日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録